
IS - インフィニット・ストラトス - 希望と絶望の力

岩田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニット・ストラトス - 希望と絶望の力

【Nコード】

N7277Y

【作者名】

岩田

【あらすじ】

“女性にしか反応しない”、世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」、通称「IS」（アイエス）の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。そんな中ISを動かした男子がいた……。しかしその内一人は普通の男子……。なのか？なにやら女の子のように見えるが……。アドバイス、意見、感想など募集します。

Story 1 自分ともう一人以外は全員女子

インフィニット・ストラトス・・・通称IS・・・。

篠ノ之博士画開発したパワードスーツで、現代兵器を大きく上回った性能を持ち、最強の起動兵器ともいえる・・・。しかしISはなぜか女性にしか反応せず、今の世の中は女性が優位な社会で、今まで優位だった男性は格下になった・・・。しかし、女性にしか反応しないISだが・・・例外はある・・・。

そう・・・世界でISを扱える男子が・・・二人も現れたのだ・・・

「・・・・・・・・・・」

ここは日本にある『IS学園』・・・

今日は入学式と言うわけで賑やかであった・・・

その正面門に僕はいた・・・

背丈は普通なくらいで、首のうなじまで伸ばした髪の色はオレンジで、途中の辺りから紐で結んで束ねていた。瞳の色はサファイアのようによく、その顔つきもかわいらしい女の子・・・のようであった。着ているのはIS学園の制服で、元々女子しか通わないと言うことで特注の男子の制服である。

「・・・なんて言うか・・・どうしてこうなったんだろうね・・・」

と呟いて、男子・・・近衛スバルはIS学園へと入っていく・・・。

そもそもの発端は一ヶ月前のことであった・・・

「うう・・・寒い・・・」

一段と寒かったその日にスバルは高校の試験会場に向かっており、試験会場の近くの駅に着いた。

「いよいよか・・・全力で行こう」

と、駅から出て、スバルは試験会場に向かう・・・

「……ええと……どこかな……？」

スバルはメモを確認しながら建物に入ったものも、どこなのか分からず、人気があんまりない廊下にいた。

「……おかしいな」

そして建物内を進んでいくと……

「どうしたの？」

と、曲がり角から声がした。

スバルは振り向くと、そこにはなにやら怪しげな人物がおり、黒いコートを着て、フードを深々と被って顔が見えなかった。

「ええと……試験会場にはどうやって行けばいいんでしょうか？
どうもメモが違うみたいで」

「そっか……。だったらこの先を進んでいって、二つ目の曲がり角を右に行けばいいよ」

「そうですか……。ありがとうございます」

と、スバルはお礼を言って怪しげな人物が言ったほうへと歩いていく。

「……フフフ……作戦成功……」

と、その人物はフードを取って、中に入れていたピンクの髪を出した。

「私の期待通りになってね……スバル君」

と、その人物……篠ノ之束は姿が見えなくなったスバルにウインクした。

「さてと……私はこれで……」

束は再びフードを被って、その場を去った……

「……ここで……いいんだよね？」

スバルは言われたとおりに進んでいって、ドアの前に立っていた。

「でも人気がないような……。まあ入ってみれば分かるかな」

と、スバルはドアを開けて中に入る。

「……誰もいない……」

中に入ったものも、誰もおらず、少し薄暗かった。

「……間違いか……。ん？」

と、出ろつとしたとき、目の端に何かが映った。

「あれって……」

スバルは向き直ってそれを見た。

「……IS?」

部屋の奥には一体のISが置かれていた。

「……ISか。確か女性にしか反応しない兵器……まあ僕は外見女の子のように見える……って言っても……関係ないか……」

スバルはISに近付いて辺りを見た。

「なんだか……凄いなあ」

と、スバルがISに触れた瞬間……

「!?!」

ISに触れた瞬間、スバルの頭の中に膨大なデータが流れ、手元ではISから光が出ていた……。しかもかなり強い光であった。

「……まさか……動くの?」

と、思っていたら……

「君！勝手に入ったらだめ……って、これは……？」

すると関係者が三人入って来たものも、スバルの手から放たれる光に驚いていた。

「ISが大きく反応している？ばかな……ここまで反応する『女子』はいなかったぞ」

(……僕……男の子なんだけど……)

外見が可愛い女の子に見えるので初見の人は必ず間違える。

「……しかも試験リストにはいません。どういうことでしょうか」

「分からない……。君……ちょっといいかな」

と、スバルは関係者に色々事情を聞かれた……

その後IS適性の検査を行われて、IS適正の中では一番高い『S』を出して、驚かれた。更に男だと言ったことが分かって更に驚かれた。
・(そりゃ驚くか……)。話によれば僕はISを使える男子二人目らしい……。そして強制的にIS学園への入学手続きが行われた……

そんでもって今に至る……

「初めまして……。私がこのクラスの副担任をします『山田真耶』と申します」

と、教室で副担任の自己紹介が始まった……

クラスは一組で、スバルは左から3列目の一番前の席に座っていた。

(……この人が……。世界で初めてISを動かした……。織斑一夏君か……)

スバルの隣には織斑一夏が座っていた。しかし女子からの視線が気になっているのかなんとなく落ち着きがない。

(まあ僕も同じなんだけどね……)

スバルも女子からの視線に気になっていた。

「……くん……。織斑君っ」

「は、はい！」

すると山田先生に呼ばれて、一夏は少し裏返った声で答えた。

そそれによつて女子生徒からくすくすと静かな笑いが聞こえた。

「あつ。ごめんね……。大声出しちゃって。でも自己紹介があつて、『あ』から始まって今『お』なんだよね……」

「そ、そうですね・・・」

と、一夏は席を立った。

「お、織斑一夏です・・・。よろしくお願いします」

と言つと、女子生徒の目が光った。

(うわぁ・・・物凄い期待の目・・・)

スバルはそう感じて、一夏のほうを見る。

「・・・・・・・・・・」

一夏はしばらくして、深呼吸して・・・

「・・・・・・・・以上です！」

ドカアアアツ・・・・・・・・!!

と、女子人一同倒れた。

「え？・・・お、俺何か悪いことと言った？」

すると、黒いスーツを着た教師が入ってきて、一夏の頭を出席簿で叩いた。

「ぐえっ!?!」

「全く……。朝から何を言うと思えば……」

と、その教師はため息をついた。

「あつ、織斑先生。会議は終わったのですか？」

「ああ。代わりをしてもらってすまない山田先生」

と、織斑先生と呼ばれる教師は山田先生に代わって教卓に立つ。

「私がこのクラスの担任をする『織斑千冬』だ。私の役目はお前たちひよっこを一人前に仕立て上げることだ」

と言つと……

「きゃああああ！！本物の千冬様よ！！」

「本物だ！私あなたに会うために九州から来ました！」

と、女子陣から盛大な声が響いた。

「全く……。いつも私のところには厄介なものが入ってくる……。これだから新学期は好きじゃないな」

と言つと……

「きゃあああ！千冬様！」

「もっと罵って！」

と、再び女子陣の音が響く。

(凄い……。織斑千冬……。いまだに人気なんだね。)

スバルは女子の反応から凄い人だと改めて思った。

「・・・千冬姉がクラスの担任？」

一夏はなぜか理解できていない様子だった。

「・・・で、お前は満足にもあいさつができないのか」

と、織斑先生は左の拳を右手に叩きつけて一夏に向いた。

「い、いや・・・千冬姉・・・」

すると織斑先生は一夏の頭を掴むと机にたたきつけた。

「織斑先生だ」

「は、はい・・・織斑先生・・・」

「え？織斑君って千冬様の弟？」

「もしかしてISを使えるのもそれが関係しているのかな？」

「いいな。変わって欲しい」

と、女子のひそひそ話しが始まった。

「静かに」

と、織斑先生は手を叩いて生徒を黙らせた。

「今日からお前たちには半年でESの基本知識を身につけてもらおう。いいな？良くななくても返事をしろ」

「はい！」と生徒は一斉に返事した……

そして休み時間……

教室の外では他の学年の生徒が見に来ていた。

そんでもって、スバルの周りには数人女子生徒がいた。

「ねえねえ……。近衛君ってハーフっぽい顔しているよね」

「あ、それ私も思ったの」

と、スバルの容姿のことに聞いてきた。

「う、うん……。僕のお父さんがイギリス人で、お母さんが日本人なの……。名字はお母さんのほうなんだけどね」

「へえ……。でも近衛君って女の子みたいよね」

「ははは……。よく言われるんだよね……。まあ慣れていくけどね」

と、スバルは苦笑いした。

「そうなんだ……。でも私最初女の子かと思った」

「そうそう。私もそう思ったの……。でも男子の制服を着ているから男子だって分かったんだけどね」

と、話は盛り上がっていた。

そうして時間は過ぎて夕方四時半……

「はぁ……。何だか慣れないなあ」

スバルはそう呟きながらも寮の廊下を歩いていた。

ちなみにさっきまで多数の女子生徒がついてきていた……。

「ええと……。ここだよね」

と、スバルは手にしていたメモを見た。

ドアの上には『1543』と書かれたプレートが張られていた。

「さてと」

そしてスバルはドアを開けて部屋に入った。

「へえ・・・結構広いなだね」

スバルは部屋の中を見ていた。

そして部屋の中央辺りに来たとき、後ろのシャワールームのドアが開く音がした。

「あら？誰が入っているの？」

と、女子の声がしてスバルは焦った。

「あつ、この部屋と同室になる人ね。さっきまでシャワー浴びていたの・・・今行くね」

「え!?!?ちょ、ちょっと」

と、シャワールームから一人の女子が出てきた。

「・・・え?」

「・・・あ」

そして二人の目が合い、しばらく沈黙が続いて・・・

そんなもって女子の顔が見るうちに赤くなって・・・

「きゃあああ!!」

と、悲鳴を上げてスバルに一発拳を入れた。

「ぐへっ!？」

それによってスバルは後ろに飛ばされた・・・

「・・・いてて・・・いきなり殴るなんてひどいよ」

と、スバルは殴られた頬をさすっていた。

「う、うるさい・・・あんな場面で入ってきたあなたが悪いんでしょ」

と、女子はドライヤーで髪を乾かしていた。

銀色の髪をして、瞳の色は水色をしていた。更にこの年には少し似合わないくらい胸が大きい。

「いや・・・シャワーを浴び終えた後だから音に気付かなかったんだよ・・・分かるわけないよ」

「・・・ま、まあ言えているわね」

そして女子はスバルのほうに向き直る。

「・・・あなた・・・近衛スバルでしょ？」

「え？知っているの？」

「知っているって・・・同じクラスでしょ」

「あっ・・・。そういえば・・・」

スバルは教室でこの女子を見かけたことを思い出した。

「それで、君の名前はなんていうの？」

「・・・ゼオラ・・・。ゼオラ・シュバイツァーよ」

「ゼオラか・・・。まあルームメイトとしてよろしくね、シュバイツァーさん」

「ゼオラでいいわよ・・・。呼びにくいでしょ」

「そ、そうなんだ・・・。じゃあ改めてよろしく・・・ゼオラ」

「ええ。まあさつき殴ってゴメンね・・・。でももうあんなことは無しよ」

「う、うん・・・。なるべく気をつけるよ」

そうして二人は握手を交わした。

そして次の日・・・

「おはよう・・・ゼオラ」

「う、うん・・・おはよう」

寮の食堂でスバルとゼオラはあいさつした。

「隣いいかしら？」

「うん、いいよ」

スバルは隣の席にゼオラを座らせた。

「・・・」

「・・・もしかして・・・朝に弱いのか？」

「うん・・・。朝って中々起きれないの・・・」

「そうなんだ・・・」

と、スバルはクロワッサンをかじる。

「まあ人っているいろいろあるよね……。僕も色々な人を見てきたから別に気にしていないよ」

「そ、そう……」

と、ゼオラはマーガリンをトーストにつけて食べた。

「じゃあ僕は先に行っているね」

「うん……。また後でね」

そうしてスバルはゼオラに手を振って一足先に食堂を出た……

「ちよつとよろしくて?」

「え?」

一時限目の授業が終わって休み時間になったとき、スバルはとある女子生徒に声を掛けられた。

金髪のプロンドヘアで碧眼の女子で、優雅さが見て取れる。

「近衛さんですね」

「……そうだけど……。ええと……。確かセシリア・オルコッ

トさん・・・でしたっけ？」

「あら・・・このわたくしを知っているなんて・・・褒めて差し上げますわ」

「いや・・・。昨日織斑君に大声で問いかけていたし・・・」

昨日セシリアと言う女子は隣の一夏に声を掛けていたので、スバルは耳を傾けていた。

「うっ・・・そうでしたの・・・まあいいですわ・・・。織斑さんと比べるとあなたは少しましのほうですわね」

「どづいづことっ」

「織斑さん比べるとあなたは物分りが良いことですわ」

「そうなんだ」

「・・・馬鹿にしていらっしゃるの？」

「いや・・・別にそんなことは・・・」

「まあいいですわ・・・。しかし織斑さんも教官を倒したと言っことですが・・・あなたもそれは」

「僕も倒したけど？」

「な、なんですって？」

セシリアは驚いた様子であった。

「いや・・・僕も教官を倒したけど」

「あなたも教官を倒したと言つのですか!？」

と、セシリアはスバルに迫る。

「う、うん……。なんていうか普通に戦っていたら……。って、落ち着いて」

「これが落ち着いていられると思っっているのですか!？」

「な、ないかな・・・」

「だったら」

すると予鈴が鳴り出した。

「うっ……。話はまた後でしますわ……。それまで逃げないことですな」

と、セシリアはスバルに指差した後に自分の席に向かう……

「……な、何なんだろう……?」

スバルは目をぱちくりさせて、次の授業の準備に入る……

「ではSHRに入る……。まず一つ決め事をやらないといけない」
そうして授業も全部終わって帰りのSHRになった。

「近々学園で行うクラス対抗戦についてだ。クラスから代表一名を決めなくてはいけない……。誰を推薦する」

「はい！織斑君がいいと思います」

「え？」

「私は近衛君がいいと思います」

「へ？」

と、次々と二人の名前が挙がっていく。

「織斑と近衛か……。他に推薦するやつはいるのか」

「異議ありですわ！」

と、勢いよくセシリアが席から立ち上がった。

「クラス代表にこのわたくしセシリア・オルコットがなりますわ！
男に任せるなんて笑止ですわ」

「……………」

「……………まあいいだろう……。代表候補は三人か……。なら織斑、

近衛、オルコットの三名は来週第三アリーナにて代表決めを行う．．
それまで各自で準備をしておけ」

(．．．なんだか．．いきなり凄い展開になりそう．．．)

そうしてSHRは終わった．．．

「それにしても．．いきなり代表候補に選ばれるなんて、やっぱり男子だからかな」

「うーん．．．そうだろうね．．．」

そしてスバルは寮の部屋にてゼオラと話しをしていた。

「でも、オルコットさんと戦うのは結構厳しいよ」

「そうなの？」

「そりゃそうよ．．．イギリスの代表候補生なのよ？候補生に選ばれるってことは相当な腕を持っているってことよ」

「そうだよね．．．オルコットさんのあの自信からすればそうだと

うね

「…………どうするの?」

「…何とか少しでも戦えるようにしないといけないから、明日の放課後に第四アリーナでISの動きとか教えてくれる?」

「わ、わたしが?」

「うん…。ゼオラも専用機持ちって言っていたしね」

「ま、まあ…そうだけど…」

と、ゼオラは首に掛けている水色のネックレスを見る。

「専用機持ちならそれなりのことは知っているでしょ?」

「そうだけど……。私はただデータ収集が目的で専用機を持っているだけだし…」

「そうかな…。でもただでさえ少ないISなんだよ。専用機を持つってことはそれなりの腕と知識があるってことだよな」

「……………」

ゼオラはしばらくして……

「わ、分かったわ……。私が教えられることは教えるわ……。でも私だけじゃ不安だからもう一人連れて行くわ」

「もう一人？」

「ええ。隣の二組にラトっっていう友達がいるの」

「へえ……ゼオラの昔からの友達なの？」

「うん。昔孤児院に一緒にいた子なの。しばらくしてとあるIS研
究所に行ったんだけど、昨日会ってきたのよ。」

「そうなんだ……」

「ラトならISの知識を私より知っていると思うから」

「そっか……。それはかなり心強いよ」

「じゃあ明日ラトに言っておくわね……。一応言っけど、言ったあ
なたが遅れないでね」

「分かっているよ。僕もそれなりの期待に応えないとね」

そうして二人はしばらく話しをした……

S t o r y 1 自分ともう一人以外は全員女子（後書き）

新しく作品を投稿しました・・・。今後意見など感想を書いてください。

Story 2 専用機

そして次の日の放課後……

第四アリーナにスバルとゼオラ、更にもう一人いた。

パープルのショートヘアをした女子で、背丈はスバルより少し低く、眼鏡をかけていた。

「ゼオラが言っていた子って、この子のこと？」

「ええ……。ラト……。今日の昼休みに言ったスバルよ」

「この人が……。？……。はじめまして……。『ラトウーニ・スウポータ』です……」

「ラトウーニ……。ゼオラから聞いていると思うけど僕は近衛スバル……。よろしくね……。ええと……」

なんて呼ぼうかスバルは悩んだ。

「な、名前で呼んでもいいですよ」

「そ、そっか……。よろしくねラトウーニ」

「は、はい」

そして二人は握手した。

「それにしても・・・訓練機をよく借りれたわね」

ゼオラの視線の先には『ラファール・リヴァイブ』を装着したスバルの姿があった。

「いやあ・・・。借りる際に書いた申請書がまた沢山あってね、それで少し遅れたんだよね」

普通ならスバルが書いた以上に申請書を書く必要があるのだが、スバルは男子と言う特別な条件で少ないとのこと・・・

「ふーん・・・まあいいわ」

そしてゼオラは首に掛けている水色のペンダントを握り締めた。

「来なさい・・・ビルトファルケン！」

そしてペンダントが輝きだし、ゼオラはISアーマーを身に纏う。

身体のラインにぴったりのアーマーをして、背中には四枚の翼を持ち全体のカラーは水色が多く、各所に白が施されていた。頭のデバイスには耳に羽のようなものを装着していた。右手には実弾とエネルギー弾を発射できる大型のスナイパーライフル『オクスタンライフル』を装備していた。

「へえ・・・。それがゼオラのISなんだ」

「ええ……。ビルトファルケンよ……。高機動戦闘を考慮に入れて射撃戦を得意とする第三世代型のISよ」

「そっか……。だからアーマーが余計にあるものじゃないんだ」

スバルは感心したようにファルケンを見る。

「じゃあ初めに模擬戦でもやる？」

「うん。ゼオラの腕も見てみたいしね」

「そうなの……。じゃあラト」

「なに？」

「私たちに戦闘を見てくれる？私は戦闘に集中しているからあんまり見ている暇がないの。だからラトが見て意見を言ってくれ？」

「うん……。わかった」

そうしてゼオラはスバルに向き直る。

「じゃあ行くわよスバル……。言っておくけど手加減はあんまりしないからね」

「僕もそのつもりだよ」

そして両者は臨戦態勢を取る。

「」「」「」

両者は同時に動き出し、ゼオラはオクスタンライフルを構えた。

「まず一発!」

そしてトリガーを引き、下の銃口からエネルギー弾を発射した。

「くっ!」

スバルはとつさに攻撃を避けると、両手にサブマシンガンを展開してゼオラに向け攻撃する。

ゼオラはファルケンの機動力を生かして攻撃を避けていき、オクスタンライフルから実弾を次々と放っていく。

「さ、さすが……。でも……!」

スバルは右手のサブマシンガンを収納すると、アサルトライフルを展開して左手のサブマシンガンと併用して攻撃していく。

その内数発がファルケンに直撃した。

「やるわね……」

ゼオラは気を引き締めて更にファルケンの機動力を高めてスバルに攻撃を仕掛けていく。

そしてゼオラがスバルの後ろに回りこむと……

「……!」

スバルは顔をゼオラのほうに向けて、一瞬遅れて右腕が後ろを向いてアサルトライフルを放つ。

「くっ！」

ゼオラはとっさに避けるものも弾丸は左脚部に直撃した。

「気付かれた？」

素早い動きでスバルの視界外から後ろに回りこんだが、スバルはそれに気付いていたが、何か違和感があった……

「まだいくよ！」

スバルはそのまま振り向いてゼオラに向けアサルトライフルを放つていく。

「くっ！」

ゼオラはいくつか弾丸を受けるものも、オクスタンライフルの『Eモード』でスバルに攻撃を仕掛けた。

「ぐっ……」

とっさに避けきれず、スバルはゼオラが放ったエネルギー弾を全て受けてしまう。

「これで終わりよ……オクスタンライフル……Wモード！」

そしてゼオラはオクスタンライフルを構えると、上下の銃口から実弾とエネルギー弾を同時一斉発射した。

「うわあああ！」

それによってリヴァイブのシールドエネルギーが尽きた……

「……はあ……。強いんだね……。ゼオラは」

スバルはリヴァイブの装着を解除して地面に座り込む。

「スバルも結構やるわね……。もし少し動きが違っていたらたぶんどうなっていたか分からなかったわ」

「そっか……。僕もまだまだだね」

「そっかもね……。ところでラトの意見はどうなの？」

「……」

するとラトウーニは何か表情が険しい。

「……ラト？」

「あつ……。ごめん……。ちょっと気になっていたことがあるの」

「気になる？どこか引っかかるところがあったの？」

「うん……。ゼオラがスバルの後ろに回りこんだときのな」

「あの時？」

「スバルはとつさに振り向いたけど……。リヴァイブは一瞬遅れて腕を動かしていたの」

「一瞬遅れてって……」

「……たぶん……スバルの反応速度にリヴァイブが追いつけていないと思う」

「……追いつけていないって……じゃあそれがなかったらどうなっていたの……？」

「……ゼオラの攻撃は多分当たっていないと思う」

「当たらないって……私の攻撃が当たらないの？もしスバルに合ったISだったら」

「うん……。動きを見て明らかにリヴァイブの反応が一瞬遅れているの」

「そういえば……。なんだか遅れていたような気がするなあ……。リヴァイブのほうが遅れていたんだ」

「そうなる」

「……あんたって……案外凄いんだ」

「うん．．．僕はあんまり自覚がないかな．．．」

「そういえば、例え反応が遅れていたって言っても動きは良かったわね．．．。スバルはISの訓練でもしていたの？」

「いや．．．。それはしてないけど．．．前に『PS』を扱っていたときがあったの」

「『PS』？．．．確かそれって．．．」

「ISの技術を応用して作られた．．．『擬似IS』とも呼ばれる機動兵器」

「あつ、そうそう．．．。それを扱っていたらなのね．．．。でもISとPSって同じなの？」

「基本的にISとほぼ同じだから操縦方法もほとんど同じだけど、ISのコアを使用していないから男性にも扱えるものなんだけど、ISのコアを使用していない分従来のISより性能が劣っている」

「へえ．．．」

「でも、PSは凄いつてある人は言っていたよ」

「ある人？」

「うん．．．。お母さんの知り合いでとある特殊部隊の人がこう言っていたの．．．『PSはISより性能は劣っているけど、操縦者の技量次第では最新鋭のISにも匹敵する力を秘めている』って言

っていたの」

「へえ・・・」

「確かにPSはISに唯一対抗できる兵器だって言うね」

「そうなんだ・・・。まあ、それでもスバルの腕は確かにあるわね・・・でもISが合っていないと少し不便ね」

「うーん・・・そうだね・・・。僕もゼオラのように専用機が欲しいな」

「たぶん専用機は与えられると思うよ」

と、ラトウーニが言う。

「そうなの？」

「うん・・・。男子でISを扱える事態特殊な例だから・・・。データを取るためにたぶんスバルにも与えられると思うよ」

「・・・そうだといいな。ところでラトウーニも専用機を持っているの？」

「う、うん・・・。専用機って言うわけじゃないけど・・・一応持っている」

と、ラトウーニは左腕にしていた青いブレスレットを見せた。

「へえ・・・ラトウーニもゼオラのようにデータ収集のためなの？」

「うん……。私の専用機は大幅に改修中だから代わりに試作機のデータ収集を行っているの……。今は改めてデータ収集を行っている『ゲシユペンストMK-? タイプS』なの」

「なるほどね……」

「ラトも結構腕はあるのよ」

「へえそうなんだ……。じゃあ今度模擬戦を行うときに相手になつてくれる?」

「……うん……。いいよ」

ラトウーニは何かおどおどした様子で答えた……

そして次の日……

「隣……いいかな?」

「ん? ……ああいいぜ」

昼休みにスバル食堂に来ており、料理を持って一夏の隣に座った。

「近衛……スバルだったかな?」

「うん・・・そうだよ・・・織斑さん」

「俺のことは一夏でいいよ」

「そう?・・・じゃあ一夏も僕のことはスバルでいいよ」

「そうか・・・じゃあそうするよ」

「でも、なんだか大変なことになったね」

「ああそうだな・・・いきなり代表に選ばれて言うってもなあ・・・
自信とかそういうものがあんまりないよな」

「そうだね・・・でも選ばれたからにはそれなりの責任があるね」

「責任か・・・そうかもな」

「でも一夏がああ織斑先生の弟って言う物凄いよね」

「そ、そうか?」

「そりゃそうだよ。何だって第一回モンドクロッソの優勝者なんだよ・・・知らない人はいないよ」

「・・・そうだな・・・」

「でも第二回は決勝戦前でまさかの棄権だからね・・・僕も見ていて驚いたよ。一体どうしたんだろう?」

「……………」

すると一夏の表情が曇る。

「あつ、ごめん……。僕悪いことを言ったかな？」

「い、いいんだ……。気にしないでくれ」

「そ、そう……。？なら、いいんだけど……」

スバルはどもも申し訳なさそうだった……

「……隣……。いいか？」

と、少しして一人の女子が来た。

「ああいいぜ箒」

そうして箒と呼ばれる女子は一夏の隣に座った。

「この人は？」

「ああ……。俺の幼馴染の箒だ」

「……。篠ノ之箒だ」

「へえ……。僕は近衛スバル……。よろしくね」

「……。あ、ああ」

「そういえば・・・篠ノ之って・・・あの篠ノ之博士の・・・」

「ああ。箒は束さんの妹だ」

「へえ・・・。そうなんだ」

「・・・」

箒はスバルを睨む。

「・・・ええと・・・僕何か悪いこと言ったかな？」

「・・・なんでもない」

と、箒はそのままご飯を食べた・・・

そうして昼休みが終わって五時限目・・・

「授業の前に、織斑、近衛には一つ伝えることがある」

授業が始まってすぐに織斑先生はこういう。

「学園で用意できる予備機がない・・・。そのため二人には専用機が与えられることになった」

「え？」

「へ？」

二人はどうも理解できていないが……

「え！？この時期に専用機を！？しかも一年の時に？」

「それって政府からの支援が来るってこと？」

「いいなあ……私も専用機が欲しい」

と、教室中が騒いだ。

「ええと……どういうこと？」

バアン！と一夏は織斑先生に出席簿で叩かれた。

「教科書六ページを読め」

「え……は、はい……。ええと」

長いので省略……

「つまりはそういうことだ。本来なら専用機は企業の所属か各国の代表、もしくはは代表候補生にしか与えられない……。が、お前たちは事情が事情だ……。データ収集を目的に専用機が与えられる。わかったか」

「は、はい」

「わかりました」

「だが、織斑の専用機は少し時間が掛かる・・・が、近衛の専用機は一足早く到着する予定だ・・・。そのため代表決めでは最初にオ
ルコットと近衛が対戦するようになった」

「僕が・・・最初に・・・？」

スバルは実感がわかなかつた・・・

「凄いいじゃない。スバルも専用機がもてるようになったわね」

「う、うん・・・。ラトウーニの言う通りになったね」

そうして夜になってスバルとゼオラは自室にいた。

「そういうえば、授業が終わった後に織斑先生に呼ばれたけど、なん
て言われたの？」

「うん・・・。僕の専用機はどうもとある研究所から送られた試作型
のISだって」

「ふーん・・・。別にいいじゃない。私のやラトのISも試作型なん

だし」

「いや、なんていうか・・・ただの試作型じゃないらしい」

「どづいづことっ」

「なんだか学園側も詳細を知らされていないISだって」

「詳細を？何だかおかしいわね・・・普通ISのデータぐらい教えるはずなんだけど」

「そうなんだよね・・・でも結構凄いISらしいよ」

「ふーん・・・まあでも専用機がもらえることだけでも凄いことだし、専用機を十分に使いこなせるようになったら、また対決しましょう」

「うん。僕もリベンジするよ」

「それにしても、いきなりオルコットさんと戦うことになるなんてね」

「うん。僕も思っていなかったよ」

「でも、私はラトと観客席から応援しているよ」

「ありがとう・・・。そうまでしてもらつと責任が重いね」

「そうね・・・でも、それだけ名誉はあるよ」

「そうだね……。やるだけのことは頑張るよ」

「その意気よ」

そうしてゼオラはスバルに向けてグツとした。

「しかし……。本当によろしかったのですか？『レッド』を送り出して」

「ああ。今は力が必要とする事態だ……」

ここはとある研究所……。そこで二人の男性が話していた。

「とはいっても、あの機体はかつて重大かつ最悪な事故を起こしたISと同じ系列のISなんですよ。もし『やつら』にばれたりすれば……」

「その心配はない……。もうやつらはあの機体のことは存在しないと思っ**て**いるだろう」

「ですが……」

「それに、『レッド』には改装を加えている。すぐには分からないようにしている」

「……………」

「それと、『R-1』はどうなっている」

「R-1はロールアウトした後に操縦者を探しているのですが……なぜか我々が挙げた候補すべてをR-1自身が拒んでいて、中々研究が進展していません……。しかしISが操縦者を拒むとは……ありえない」

「……………R-1は自身が選んだ操縦者しか認めない……。そういう風に作り上げている」

「なぜそんなことを……。それではあまりにも効率が悪いですよ」

「それでいいのだ……。R-1は『SRX計画』の要となる機体だ」

「……………ですが」

「その心配は要らない……。R-1の操縦者に相応しい人物を知っている」

「操縦者に相応しい人物とは？」

「かつて第二回モンドクロッゾで決勝戦まで勝ち上り、棄権での優勝をした選手の息子だ」

「まさか……R-1には男性を乗せると言うのですか？ですがそれ

では」

「確かにISは女性にしか反応しない……。だが、完全に反応しないわけではない」

「……それは……最近現れたISを扱える男子がいるからですか？」

「そうだな……。とりあえず、計画を進めてくれ……」

「……イングラム少佐……。あなたは一体……。何をしようとしているのですか」

「……いずれ……。分かる時が来る……」

そうしてイングラムと呼ばれる男性は研究室を出た……

S t o r y 2 専用機（後書き）

次回主人公機が登場。ちなみにいうと、なぜラトウーニがゲシユペ
ンストMK-？ タイプSだというのは、後に分かりますよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277y/>

IS - インフィニット・ストラトス - 希望と絶望の力

2011年11月21日22時47分発行